恋花　　－花宮稀書－

kuu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋花　　－花宮稀書－

【Ｎコード】
Ｎ２３２４Ｚ

【作者名】
ｋｕｕ

【あらすじ】
花を愛でることが好きな天帝の姫君は、神仙界と人界のありとあらゆる花を宮城に集め、常に花が絶えることのない庭園を造った。
そんな伝説が語り継がれている里で育った少年が、怪異に巻き込まれた故郷と家族を救うために奔走する物語。　（タイトルは「こいのはな　－かきゅうきしょ－」とお読み下さい）

001　伝説

玖藍国の東端、李州霄郷。

緑深いこの郷には、九百年余りの昔より言い伝えられている一つの伝説がある。

建国の祖、飛竜帝が一代にして周辺諸国を統合し、世界に誇る広大な王国を築くことができたのは、神の加護を受けていたからこそなし得た偉業だと伝説は謳う。

彼が天帝…神仙界を統べる帝と交わした約定により、霄郷の東方にそびえ立つ崇峻山は神の領域とされた。
その中では、飢えもなく、病いもなく、老いることもない。
地上のどんな苦しみも悲しみも存在しない、神と仙の世界に属する場所。

飛竜帝は天帝の姫君のための宮城を山頂に建立した。
花を愛でることが好きな姫君は、神仙界と人界のありとあらゆる花を宮城に集め、常に花が絶えることのない庭園を造った……と伝えられている。

崇峻山を禁足地とする命は代々の国王に引き継がれ、今ではこの伝説の真偽を確かめる術はない。
ただ伝説だけがこの郷に語り続けられていた。

霄郷で生まれ育った者は、姫君の宮城を『花宮』と呼び、誰もが一度は花宮への入城を夢みるという。

002　しあわせになりたい

空から銀糸(ぎんし)をまくように、静かに雨が降り続く夜だった。
無音の闇に、雨が降る。
底冷えする寒さと静寂をたたえた森の中を、二つの影が行く。
暗闇の中を明かりも灯さず、人里を目指して進む。
その歩みには、足音や熱い息遣い……『生物』の気配が無かった。
ソレらは乱立する木々の間をすり抜け、まっすぐに目的地へと向かう。
二つの影はやがて森を抜け、小高い丘の上から里を見下ろす。
闇の中に小さな光が灯(とも)っていた。
人がいる、証(あかし)。
あそこには生きている人間が、灯火(ともしび)の下にいる。
「……はじめましょう」
影のひとつが発した声に答えるかのように、金色の瞳が闇の中で輝く。
二つの影は丘の上から一気に里へ向かって駆け出した。

民家を襲い、適合する『贄』を奪い取ってゆく作業は、彼らにとっては至極慣れたものだった。

自らの気配を絶ち、音を消し、目的のみを果たす。
ただ、それだけ。

どれだけの時間が過ぎたのか。
地の果てが白みはじめるのを目の端でとらえると、影…否、少女のカタチをした『生き物ではない何か』は殺戮の手をとめて空を眺めた。

「――もうすぐ夜が、明ける」

ゆっくりと、今夜の収穫を数えてゆく。

「……これで、きゅうじゅう、きゅう。贄は全て手に入れた。あと必要なのは、あの花だけ。……あれを手に入れれば、やっと、私の願いは叶う……」

しあわせになりたい、しあわせになりたい、しあわせになりたい。
あなたと、しあわせになりたい。
あなたと交わした約束を、無かったことになんてしない。

どんな犠牲を払っても、わたしは願いを叶える。

死が満ちた里の中に、甲高い笑い声が響いた。

その声を聞く生者は、誰もいない。

二つの影は来たときと同じように、音もたてずに夜と朝の狭間に消えていった。

003　幼馴染

李州霄郷(りしゅうしょうきょう)の里(さと)、清蘭(せいらん)。

清蘭は四方をまろやかな山に囲まれた山間にある。

季節は春をむかえていた。

森は新緑に彩られ、光をうけて輝く。

「藍瑛(らんえい)、藍瑛っ。何処にいるの？」

少女の澄んだ声が森の中を風にのって走る。

その声には捜し求める相手が見つからないことへの苛立ちが含まれていた。

「藍瑛、何処なの？」

澄んだ声は静謐(せいひつ)な森の奥の湖まで響く。

その声に反応した者は二人いた。

湖のほとりの大樹に背を預けて座っていた少年は、穏やかな眼差しを空に向け、少女の声を運んできた風が流れてきた方向を眺めた。

漱祥(そうしょう)は読みかけの書物を閉じ、苔むした柔らかい地面から立ちあがると、水浴をしている友人に声をかける。

「藍瑛、聞こえたかい？　怜琳（れいりん）の声だ。君を探してるみたいだよ」

静かな湖水がゆらぎ、漱祥の声に答えて湖の水面からもう一人の少年が勢いよく顔をだす。

「ああ、俺にも聞こえた」

日焼けした顔に無邪気な笑みを浮かべ、藍瑛は漱祥に向かって手を振ってみせた。

藍瑛の笑顔は、漱祥を苦笑させる程屈託がない。

彼の水に濡れた黒髪は、ぴょんぴょん好き勝手な方向を向いている。青と紫を混ぜ合わせたような藍色（あいいろ）の瞳は、光を受けてくるくると色彩を変えながら、少し不安げに漱祥を見上げた。

「なんかあいつの声、機嫌悪そうじゃなかったか？」

藍瑛の言葉に漱祥はうなづく。

「そうだね。藍瑛、身に覚えはないの？」

「ない。……ないはずだけど、ひょっとしたらあるのかもしれないな」

自信なさそうな表情で藍瑛は額にかかる濡れた髪をかき上げた。

叱られる直前の子供のような落ち着きのない様子がおかしくて、漱祥は微笑む。

藍瑛と漱祥、そして怜琳は幼い頃からの友人だった。

幼馴染で気心もしれているせいか、お互いに遠慮のない物言いをする。

怜琳は里の者達の輪から外れがちな二人の面倒を見るのは自分しかいない…と思っているらしく、最近は特に藍瑛に対し何かにつけてあれこれと世話を焼くようになっていた。

「二人で同じことしてても、怜琳に怒られるのはいつも俺だけなんだよな。お前、気がつくと怒られる側からなだめ役に回ってるし」

藍瑛は悔しそうに呟く。

「そうかな？　だとしたら『年の功』ってことかもしれないな。ああ、『人徳』ともいうよね」

余裕の笑顔で平然と切り返され、藍瑛は返す言葉がなかった。

漱祥は三人の中では一番年長で学問に長けており、人当たりも要領もいい。

誰に対しても物腰が柔らかく、常に笑みを絶やすことはない。

藍瑛はひとつ年上の幼馴染の顔をじっと見つめる。

白皙（はくせき）の肌に色素の薄い亜麻色の髪。

深く輝く碧色（みどりいろ）の瞳には理知的な光を宿し、穏やかな笑顔で常に柔らかい雰囲気をたたえている。

隙のない完璧な所作は、礼儀にうるさい古老（ころう）たちをも満足させ、老若男女問わず里の人気者だった。

藍瑛が漱祥の欠点を探して考えに浸っていると、また怜琳の声が聞こえてきた。

先程よりも近い。

間違いなく、何かを怒っている声だった。

藍瑛は必死に漱祥に頼みこむ。

「水の中に潜って隠れてるからさ、俺はここにはいないって怜琳に言っといてくれよ」

「悪いけど、断るよ。後で僕まで怜琳に怒られたくないからね」

藍瑛は漱祥がまるで神像であるかのように、手をあわせて拝(おが)んだ。

「漱祥、俺達友達だよな？　頼む、このとーり」

「だめなものは、だめ」

漱祥はきっぱりと拒否する。

「藍瑛、早くそこから上がって、服を着たほうがいいと思うよ。でないと……」

漱祥が言外に匂わせた可能性を悟ったのか、藍瑛はその言葉に素直に従った。

「そうだな。こんな姿を見られたら大変だ」

藍瑛は早朝の剣の稽古(けいこ)を日課としている。
今日は漱祥を誘って、稽古の汗を流すために森の湖まで来ていた。
男同士ならどんな姿でも構わないが、女の子に対しては里のしきたりに従って気を使う必要があった。
藍瑛は大急ぎで湖の岸まで戻って水の中から這い上り、脱ぎちらかした上着を手に取る。
その瞬間、藍瑛の背後に怜琳がいきなり現れた。
「見つけたわよ、藍瑛！」

００４　探していた理由

「うわっ？」

藍瑛（らんえい）と怜琳（れいりん）は、お互い相手の姿を見て動きが止まる。

数瞬後、凄（すさ）まじい悲鳴が森全体に響きわたった。

「きゃあぁあああー！」

大音量の悲鳴に、藍瑛は思わず耳を押さえる。

「藍瑛の馬鹿！　どうしてそんな格好してるのよっ」

怜琳の罵倒（ばとう）の言葉が追い討ちをかけるように藍瑛へと投げつけられ、騒々しい足音が続く。

しばらくすると、森はもとの静寂（せいじゃく）を取り戻した。

どうやら怜琳は里へ引き返して行ったらしい。

藍瑛はおそるおそる耳から手を離し、ゆっくりと立ちあがる。

頭の中ではまだ怜琳の悲鳴がこだまして、ひどい頭痛がしていた。

「――耳、壊れるかと思った」

「確かに。僕もまだ耳が痛いよ」

漱祥(そうしょう)は藍瑛の隣に歩み寄り、感嘆したように言った。

「さすがに女の子が集まるとすごい悲鳴だね」

ぽとり。

気をとりなおして、とりあえず服を着ようとしていた藍瑛の手から上着が落ちた。

藍瑛は漱祥の顔を見ながら尋ねる。

「いま、お前、何て言った？」

「女の子たちの悲鳴はすごかった…と言ったけど？」

「女の子たち？　怜琳のほかにも誰かいたのか？」

「怜琳の後ろに五人いたよ」

こともなげに漱祥は答える。

「みんな、藍瑛の姿を見てびっくりしたんだろうね。あの悲鳴にはこっちも驚かされたけど」

漱祥の声音(こわね)には、明らかにこの事態を楽しんでいる節(ふし)があった。

だが、藍瑛にはそのことに気づく余裕がない。

清蘭(せいらん)の里(さと)では『異性の前では衣服を乱さず、肌を見せない』という、昔からのしきたりがある。

複数の少女達に自分の乱れた格好を見られた（見せてしまった）事態に、藍瑛は言葉を失い愕然（がくぜん）として立ち尽くした。

藍瑛の父親は、清蘭の里の里宰（りさい）の地位に就いている。
王都から里へと派遣された中央の官吏（かんり）の中では最上位の位（くらい）にあり、里の執政を一手に担う。

里宰の仕事の一つに、里の者たちに国の様々な法を守る指導を行い、違反した者を罰する役目がある。
その里宰の息子が、里のしきたりを破ったと里の者たちに知られたら、どんな騒ぎが起こるのだろうか。

漱祥は真剣に事態を憂（うれ）いている藍瑛の様子に気がつくと、肩を優しく叩いてなぐさめた。

「藍瑛、落ち着いて。君は上着は脱いでいたけど、長襦袢（ながじゅばん）は脱いでいないし、下の衣服はそのままだ。丸裸だったわけじゃない。肌を見せたといっても、襦袢が濡れて肌が透けて見えていただけだし。……厳密に言えば確かに肌を見せないというしきたりには反していたけれど、今回のことは一種の事故だ。彼女達に頼んで、今日のことは黙っていてもらえばいい。大丈夫、大きな騒ぎにはならないよ」

「――――本当にそう思うか？」

「ああ」

漱祥の気遣うような言葉と眼差しが、いつもより温かく感じられた。

藍瑛は里のしきたりを破ったことに対する良心の痛みをなんとかなだめ、地面に落とした上着を拾う。

その時、近くに何か白いものが落ちているのに気がついた。

「なんだこれ？」

拾い上げてよく見ると、それは巻尺（まきじゃく）だった。

漱祥はひょいっと身を乗り出して、藍瑛の手の中の小さな巻尺を見やる。

「さっき、誰かが落としたものかもしれないね」

藍瑛の脳裏に、昨日怜琳と交わした約束が甦った。

『明日は藍瑛の衣装の採寸するから、朝一番で私の家に来てね。早くしないとお祭りに間に合わなくなっちゃうから、絶対に忘れないでよ』

「そうか、あいつ…祭りの衣装の採寸を今日やるって言ってたっけ。だから俺のこと探してたんだな」

「花祭りの衣装の採寸？　藍瑛の祭りの衣装の採寸を、怜琳が？」

漱祥は目を丸くして尋ねた。

「ああ。今年は叔母さんじゃなくて、怜琳が俺と親父の分を作って

くれるんだってさ。あいつ料理はうまいけど、裁縫はへたくそだから、この機会にみっちり修行させられる…って話だぜ。一体どんな衣装ができあがることやら」

藍瑛は従妹の顔を思い浮かべる。

白桃のようなふっくらした肌に空色の瞳、金色の美しい髪を長く伸ばし、毛先は柔らかく巻いている。

身内の欲目であることを差し引いても、なかなかの美少女だと思う。

怜琳は学業と料理洗濯…と、大抵のことなら何でもそつなくこなせるのだが、裁縫だけは上達の兆しがまったくないことを、幼馴染である二人はよく知っていた。

「雑巾でさえまともに縫えない怜琳に、祭事の礼服を作らせるなんて…大胆というか、無謀というか。本当に大丈夫なのかな」

漱祥の言葉に藍瑛は笑って答えた。

「ま、俺としては祭り自体に興味ないから、どんなに変なものでも構わないけど、親父は本気で衣装の出来上がりを心配してたな。『里宰が神事でもある祭りに不出来な衣装を着ていくわけにはいかないが、怜琳の作ってくれた衣装を無下(むげ)にもできない』とか言ってさ」

何事にも動じない父親が、今回の件では珍しくうろたえている。

藍瑛にはそれが可笑しかった。

可愛い姪の心を傷つけることになったら……と、悩んでいる父親の姿を思い出して笑っていたが、漱祥の静かな声で我に返る。

「――藍瑛、君はまた皆の嫉妬（しっと）の的（まと）にされるね」

「嫉妬？」

藍瑛は首を傾げた。

まったく理解できないといった藍瑛の様子を見て、漱祥は苦笑いを浮かべて言った。

「僕達はまだ大人じゃない。だけど……子供でもないってことだよ」

005　謝罪と疑問

十五年前、藍瑛の父親は国王の命により都から派遣され、この清蘭の里の里宰となった。

里宰は国の政策に従って里を治める。
その他にも里に住む人々の相談役としても活躍し、冠婚葬祭や学舎の教育指導なども取りしきる。

父は藍瑛の母を病気で失った後、再婚はせずに男手ひとつで藍瑛を育てた。

藍瑛が幼い頃、父の仕事が忙しい時には父の妹のもとへよく預けられた。
叔母夫婦は娘である怜琳と藍瑛を分け隔てなく扱い、愛情を注いでくれた。

怜琳の家は藍瑛にとっても自分の家のようなものだ。

だが、先ほどのことを考えると、今は気軽に入っていけない。
藍瑛は怜琳の家の前で重いため息をついた。

きっと怜琳はまだ怒っていることだろう。
先ほど森で拾った巻尺だけ門の前に置いて、このまま帰ってしまおうか…ちらりとそんなことを考える。

その時、頭上から怜琳の声が降ってきた。

「藍瑛、遅いわよっ。うち家の前でうろうろしてないで、早く入ってきて」

藍瑛が顔をあげると、怜琳が自室の窓から身をのりだしているのが見えた。

「ほら、早く！」

「……。」

藍瑛は大人しく従う。

怒っている時の怜琳に逆らうと後が怖い。

門を開け玄関に入ると、そこには仁王立ちをした怜琳が待ち構えていた。

怜琳は有無を言わさず藍瑛の腕を取ると、強引に居間までひきずってゆく。

「ちょっ……、おい？」

怜琳は無言で藍瑛の手から巻尺を奪い返すと、すかさず採寸をはじめた。

藍瑛の腕の長さや胸囲を、たどたどしい手つきで計ってゆく。

「怜琳？」

遠慮がちに藍瑛は声をかける。
返事はない。
ぴんっと張り詰めた部屋の空気は、怜琳の機嫌がかなり悪いことを示していた。

「――怒ってる、よな？」

「……。」

「今日約束してたのに、忘れて悪かった。ごめん」

「……。」

怜琳は藍瑛の謝罪の言葉が聞こえていないふりをして、黙々と採寸を続ける。
藍瑛は怜琳の手を取り、無理矢理作業を止めさせた。

「俺が悪かった。反省してる。これからは気をつける。……だから機嫌直せよ、な？」

怜琳は答えない。
きゅっと唇をつぐみ、藍瑛の顔を見ようともしなかった。
藍瑛はそのまま怜琳の顔を見つめて、彼女の怒りが静まるのを待った。
怜琳は顔をそむけて、藍瑛のまっすぐな視線を受け流していたが、やがておもむろに口を開いた。

「――まだ、私に謝ってないことがあるでしょう？」

こころなしか怜琳の顔が赤い。

「ああ、あれか……」

つられて藍瑛も赤面する。

掴んでいた怜琳の手を離して、何と言えばいいのか考える。

だが、適当な言葉が見つからなかった。

怜琳はくるっと顔を正面に向けると、大きな瞳で藍瑛を睨みつける。

「そう、里のしきたりを破った『あれ』よっ」

「あれはだな……」

「あれは？」

困った。

藍瑛は片手で頭を掻く。

その時、ふと漱祥の台詞を思い出した。

「あれは、事故だ！　そう、事故なんだ。お互いに不幸な事故で、双方の心に傷が残ったが、事故なんだから仕方がない！」

「事故？」

「そうだ。だから忘れろ。いいか、何もなかった。お前は何も見なかったんだ！」

苦し紛れに暗示をかけようとする藍瑛の頬を、怜琳は指でつねりあげる。

「何が事故よっ。ぜ　ん　ぶ、藍瑛のせいじゃない。約束を破られた上に、驚かされた被害者は私で、藍瑛は加害者でしょ？　――ほら、謝罪の言葉は？」

ぎりぎりと両方の頬をつねられながらも、藍瑛は謝った。

「ひゃい、ひょのほーふぃふぇす。すひぃばすぇん　（はい、その通りです。すいません）」

「わかればよろしい。今回は特別に許してあげる」

怜琳はにっこり笑って藍瑛の頬から指を離した。

藍瑛はその笑顔を見てほっと息をなでおろす。

痛む頬を押さえながら、怜琳に満面の笑みを向けた。

「なぁに？」

「いや。やっぱりお前は怒ってる顔より、笑ってる顔のほうがずっといいなって思って」

笑っている時の怜琳は、文句なしに可愛い。

藍瑛はいささか身びいきな自分を自覚しつつ、従妹の頭をなでる。
怜琳はあわててその手を払いのけた。
「な、何よ。いきなり何言ってるのよっ」
怜琳の頬はほんのり赤く、照れたようにそっぽを向いた。
藍瑛は最近、怜琳の怒った顔しか見ていなかったので、新鮮な気持ちで言葉を重ねる。
「笑ってる時のお前は本当に可愛いな。いつも怒ってないで、笑っていればいいのに」
そうなれば、俺も静かに楽しく暮らせるし。
いいなぁ、そうなったら…。

平和な空想にひたっていると、地の底から響くような低い声が、藍瑛を現実に引き戻した。
「――藍瑛、いつも私が怒る原因を作ってるのは、誰だかわかってる？」
まずい。
怜琳の機嫌を再び損ねてしまったらしい。
藍瑛は急いで話題を変えた。
「そうだ！　漱祥が言ってたけど、あの時、怜琳の他にも女の子が

五人いたんだって？　後でその子たちの所にも謝りに行って、今日のことを黙っていてくれるように頼まないと……」

怜琳は話をそらした藍瑛をしばらく睨んでいたが、しぶしぶ追求を諦めた。

「謝りにいく必要はないと思うわ。みんなけっこう喜んでたし」

「……へ？」

藍瑛は耳を疑った。

喜ぶ？

なんでだ？

困惑する藍瑛をよそに、怜琳は話を続けた。

「彼女たちには、私の方から口外しないように頼んでおいたから大丈夫。伯父さまや里の皆には、今日のことは秘密にするって、ちゃんと約束してくれたわ」

「ああ。悪い、助かったよ」

藍瑛はほとんどうわの空で礼を言う。

何故あの場にいた少女達が喜んだのかがわからない。

ああいう場合、さっきの怜琳のように怒るのが普通の反応じゃないか？

怜琳に理由を訊いてみたい気がしたが、なんとなく言い出せなくて

別の疑問を口にする。

「そういえば、その子達は何のためにあの森に来てたんだ？　あの森は崇峻山（すうしゅんざん）に近い場所だから、俺たち以外の里の人間は近づかないはずなのに」

006　花祭り

昔から崇峻山(すうしゅんざん)は聖域として扱われていたが、飛竜帝の御代(みよ)からは神域となって、何人も足を踏み入れることの赦されぬ禁足地となった。

里の者達は、崇峻山の麓(ふもと)近くの森にさえも近寄ろうとしない。

崇峻山には天帝の姫君の宮城(きゅうじょう)『花宮(かきゅう)』があるという言伝えを信じており、神域にふさわしくない者が山に近づくと、神の怒りに触れ死を賜る…と畏れているのだ。

藍瑛(らんえい)の知るかぎりでは、あの森に出入りしているのは、自分と漱祥(そうしょう)と怜琳(れいりん)だけのはずだった。

「彼女達は一ヶ月後の花祭りに備えて、調べたいことがあるから協力して…って言って、私について来ていたのよ」

「調べたいことがあるから、森に？」

いきなり話がとんでもない方向へ飛んでいった気がする。

話の要領を得ない藍瑛を見て、怜琳は呆れたように笑った。

「春の花祭りは豊穣(ほうじょう)を祈願するお祭りでもあるけど、ほかにも重要なことがあるでしょ？」

「重要なこと……？」

藍瑛は考え込む。

父親はこの清蘭(せいらん)の里(さと)の祭りを一手にとりしきっているが、息子である藍瑛は里の祭りにほとんど参加したことがなかった。

父親の手前、参加してるように見せかけているが、いつも途中で抜け出しているので、祭りの意義や内容にはてんで疎(うと)い。

「悪い、さっぱりわからない」

「…えっ？　本当に知らないの？」

「――真面目に最後まで参加したことなんて、一度もないからなぁ」

藍瑛はきまり悪そうに頭を掻く。

「もうっ、赤ちゃんの時からここに住んでるくせに、知らないなんて信じられない」

怜琳は珍獣を見るかのように藍瑛をながめた。

「俺が祭りに参加してると、馬鹿な奴らがしつこく喧嘩売ってくるんだよ。騒ぎを起こして、せっかく盛り上がってる祭りに水を差したら悪いだろ？　親父にも迷惑かけたくないしな」

「……。」

藍瑛の父は今のところ十五年間清蘭に赴任して里宰(りさい)を務めているが、人事異動があれば任を解かれ別の地に赴くことになる。

藍瑛は幼い頃から、里の子供達に『いつかどこかへ出てゆく余所者(よそもの)』として扱われていた。

里に住む人々はおおむね親切だが、余所から来た者を倦厭(けんえん)するきらいがある。

子供は更に容赦(ようしゃ)がなく、『身内』と『それ以外』を区分する。

「藍瑛も少しは漱祥を見習って、もっと愛想よくすればいいのに」

ぽつり、と怜琳が小さく呟いた。

漱祥の父親も都から派遣されている官吏(かんり)で、薬師として働いている。

漱祥は十二年前、両親に連れられてこの里に来た。

初めて出会った時、藍瑛は四歳、漱祥は五歳。

幼い頃からまったく性格の違う二人が仲のいい友達になったきっかけは、『余所者』という共通点だった。

藍瑛は沈んだ表情を浮かべる怜琳の顔をのぞきこみ、元気づけるために笑ってみせる。

「漱祥(あいつ)は人がよさそうに見えるし、頭もいいから、里の奴らを口先ひとつで手玉に取るなんてお手のもんだろうな。――ここだけの話、

漱祥みたいな奴は、薬師や医術師よりも、宣教師や詐欺師のほうがむいてると思わないか？」

藍瑛の台詞に怜琳は目を丸くした。

「藍瑛ってば、そんなこと言っちゃだめよ。漱祥が聞いたら怒るわよ。」

「でも、はまってるって思うだろ？」

重ねて言い、にやっと笑う藍瑛に怜琳も肯く。

「……確かに、けっこう似合うかもしれないわね」

「やっぱお前もそう思うだろ？」

漱祥ならば、信者に教えを説くことも、富豪を騙して金品を騙し取ることも、微笑みながら容易にこなしてしまうだろう。

二人はお互いに頭のなかで、笑顔と巧みな話術を駆使して活躍する幼馴染の姿を想像して笑った。

「――で、豊作を祈願すること以外の重要なことって？」

藍瑛はさりげなく話題を元に戻した。

怜琳は少しためらってから、ゆっくりした口調で答える。

「花祭りの最後に、未婚の男女だけが輪になって踊りを踊るの。『

幸来(こうらい)』っていう踊り。中心となって踊るのは成人した人たちだけど、成人前の子供でも参加できるのよ」

「へぇ……」

藍瑛は初めて聞く話に大人しく耳を傾けていた。

玖藍国(くらんこく)では男子の成人の歳は十七、女子は十五と定められていた。成人を迎えると親から独立し、家や土地などの私財を持つことを認められ、結婚が可能になる。

「その踊りがきっかけで恋が生まれて、やがて結婚…って話になることが多いから、みんなものすごく真剣に参加しているの。将来の伴侶と出会う可能性が高い花祭りは、未婚の人たちが互いに外見や内面もふくめた評価をする場にもなっているわ」

「そ、そうなのか……？」

怜琳の真剣な眼差しと言葉の勢いに押されて、藍瑛はごくりと息をのむ。

「踊りの後、結婚を望む人は祭壇の前で相手に求婚するの。『恋歌(れんか)』を歌って……」

「レンカ？」

「恋の歌のこと。自分の気持ちを詩(うた)にして、相手に捧げるの。求愛を受け入れる場合は、相手と詩を交わして気持ちを伝えた後、祭壇の上で自分の衣(ころも)と相手の衣を交換するのよ」

怜琳はひと息おいて続ける。

「この時、お互いに一番上に着ている衣を脱ぐことが…相手の前では着飾らない素直な本当の自分をみせることを約束する意味を持つの。この儀式があるからこそ、素肌を見せ合うことが、心を許しあった証とされるようになったんですって。だから、私たちの里では、普段は肌を見せちゃいけないってしきたりがあるのよ」

藍瑛は怜琳の説明を聞いて、里のしきたりの由来とその意味を理解した。

同時に一つの疑問が頭に浮かぶ。

「――皆の見てる前で、なんでそんなことするんだよ？　すげえ恥ずかしくないか、それ」

怜琳はほとほと呆れ果てた顔で、ため息をついた。

「『求婚の儀』は、天帝の姫様と里の皆に夫婦になることを認めてもらう儀式なんだから、恥ずかしいなんて言ってられないの。そうゆうものなの！」

怜琳は握り拳で力いっぱい断言する。

その勢いに押されて、藍瑛は数歩後退した。

「わかった。よくわかった！」

「――本当にわかってる？」

怜琳の疑惑に満ちた視線に耐えながら、藍瑛は肯いて見せた。

「ああ。」

「じゃあ、今日森に来てた女の子たちの気持ちも、ちゃんとわかってる？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2324z/

恋花　　－花宮稀書－

2012年1月3日01時47分発行